



別の顔

放課後は



after

現在は、月々金曜日までを学校、土・日曜日・祝日は介護事業所で仕事を続けています。看護の勉強をして介護の現場に戻ることで、今まで分からなかったことに気が付き、理解できることが増えました。まだまだ勉強時間も足りなくて覚えることだらけですが、社会人入学の私に対して同級生と同じよう

鹿屋看護専門学校
きよやまみく
清山 未来 さん(1年生)



祖母が鹿屋看護専門学校の先生を務めていたことがあり、縁のある学校。9月に行われた白爛祭では、訪れた子どもと看護体験を行うなど、地域の人と一緒に祭りを楽しんだ。

に接してくれる仲間と、同じ目標に向かって取り組める環境にありがたさを感じています。
今後は、何より看護学校で学んできた知識と技術で一人でも多くの命を救うことを目標に、どうしたら良いかすぐに判断し行動を求められる救急の現場を目指して頑張ります。



高校を卒業後、介護士として働いてきました。仕事をする中で、急変時や看取り時に「介護士は看護師と違ってできることが少ない」と悔しく思い、昨年鹿屋看護専門学校に入学しました。



昔、度尾で起きた出来事にクローズアップ！



タイムトラベル ～温故知新～

23話

川原園井堰の柴掛け



川から田んぼへ水を引くための取水方法の一つに「柴井堰」(柴堰)があります。串良町細山下中地区の串良川に毎年作られる柴堰は、日本で最後の柴堰であり、その希少性や景観、また、交流の場としての機能が高く評価されています。
川原園井堰は、江戸時代初期に薩摩藩の新田開発により現在の場所に作られました。原型は大きな木の杭を直接川床に打ち込み、束ねた柴を杭の間に配置する形式でしたが、明治期に石基礎への改築工事が行われました。しかし、この石基礎は大きな洪水のたびに流出し、昭和24年に発生した台風による集中豪



▲堰をつくる伝統技法は、この地域に春を告げる風物詩となっており、この日を境に一気に田植えが本格化する

雨で甚大な被害を受けたことから復旧工事が行われ、現在のコンクリート基礎となりました。
そのコンクリートの基礎に柴を配置する柴掛けは、串良町土地改良区の関係者などで行われます。「マテバシイ」というブナ科の常緑樹を伐採し、芯となる幹3〜4本の周囲に葉付きの枝10本ほどを包み竹で縛ります。川幅43mをせき止めるために必要な柴の束は150束程。3月中旬に、15〜20人で柴束をコンクリート基礎部分に並べ掛け、仕上げにむしろを上流側に敷き詰めて「柴堰」は完成します。
川原園井堰から取水する水で米を作る農家は約900世帯。歳月をかけて改良された堰と、自然の材料が融合した川原園井堰は、この地域に安定して用水を供給するとともに、先人の知恵による水のありがたさを教えてくれます。